法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-06

チュニジア紀行1980

EMURA, Hirofumi / 江村, 裕文

(出版者 / Publisher)
法政大学国際文化学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
Journal of Intercultural Communication / 異文化. 論文編
(巻 / Volume)
21
(開始ページ / Start Page)
41
(終了ページ / End Page)
56
(発行年 / Year)
2020-04-01

〔エッセイ〕

チュニジア紀行 1980

江村　裕文
EMURA Hirofumi

【解説】

ここに収録したのは、筆者が京都産業大学大学院言語学研究科修士課程１回生（関西では１年生）に在学中の 1980 年の夏に、1979 年に国際交流基金の関係で東京で知り合った国立チュニス大学付属ブルギバ・スクール（現代語インスティチュート）の校長先生、マームーリ氏から、奨学金を出すからアラビア語のサマー・コースに参加しないかとの勧誘にこたえてチュニジアに出かけた際の体験等をエッセイ風にまとめたものである。1981 年から「京都産業大学新聞」に連載したものに若干手を加えて、誤植や不適切な表現等を修正した。（補）はもとの原稿に書いたもの、（注）は今回付け足した内容である。

この旅行は現在の目から見ると危険極まりない計画で行われたと思う。当時は今のようにクレジットカードは普及しておらず、旅行中の費用は全額トラベラーズ・チェックにして所持していた。また、チュニスに行くのに、ローマから飛行機を利用すれば１時間、パリからでも２時間なので、手軽に行くには飛行機が順当であろう。さらにローマに着いた最初の日は、ローマにホテルを予約しておくのが普通だと思うが、着いた足でナポリまで列車で行き、当日の夜はナポリでホテルを探そうというのは、あまりにも無謀というしかない。こんなこと

を自分に課したのは、筆者自身が、できる限り自分の力で旅行をするというチャレンジの必要を感じていたからである。旅行会社のカウンターで旅程のすべてを決定し、それに従って行動しても、何の自信にもならないだろう。その点、この1980年の旅行で得た自信は計り知れない。

1　リビア人とナポリ

これは今夏（6月～8月）、機会を得てチュニジアを中心に旅行をした際の思い出の一場面をペンに託したスケッチである。

彼と知り合ったのはローマのテルミニ駅、ナポリ行きのホームでのことだった。彼の荷物の名前のところにアラビア文字を見つけ、私のほうから声をかけたのだ。

聞いてみると商用でナポリへ行くという。この後彼とはナポリを発つまでの数日間、共に行動することになる。

ナポリの中央駅で、それでは、と別れようとすると、もしよかったら一緒に来ないかという。こちらもまだホテルは決めていないし、心細い一人旅なものだからついて行ってみることにした。「挑発には乗れ」というのが私を送り出してくれた教授たちの一人のことばだったから。

彼は自分の会社のナポリ支店－と私には思えた－に電話をかけ、しばらくしてそこから迎えの車が来た。彼はやって来た二人のナポリ人に私を友人として紹介した。すぐに彼らの一人が私のスーツケースを

トランクに運び込み、彼らが何者であるのか確認するひまもなく私も車の中にいた。

運が向いているのか、それとも彼らはグルになって私をどうにかしようとしているのではないか。全く予期していなかった出来事に混乱しそうになるのをなんとか抑え、もしもの場合を想定して色々と考えをめぐらしているうちに、車はナポリの雑踏に入り込んだ。

車が横付けされたのは豪華なホテルの玄関で、見回すとナポリ湾が一望でき、すぐそばには古い城跡が岬に立っている。聞いてみるとここが有名な「サンタ・ルチア」である。するとあの城が「卵城」ということになる。このホテルはナポリ一のホテルだそうだ。宿泊費の高いのにも驚いたが、中途半端なところに泊まって、あり金全部消えてしまうよりはいいだろう、これも何かの縁かと今夜はすすめにしたがってそこに泊まることにした。

一休みしてから、夕食に行こうと彼を誘うと、今夜は先ほどの二人が夕食に招待してくれるはずだということだった。

この上ナポリ料理に招待されるとはよくよくツイているのかななどと思ったが、まてまて、私も一緒に招待されるとは限らない、では夕食はどうしようか、などと考えながらロビーのソファーに座っていると、ナポリ人たちがやって来た。

リビア人は私を友人として扱うよう口添えしてくれ、私も同行できることになった。

遂にこちらから名乗ったり、彼の名前を正式に聞いたこともなかったのに、友人、それもほんの数時間前に偶然知り合ったばかりの間柄なのに、友人ということで彼はなにくれととなく心を遣ってくれた。アラブ人の一面を私はそこに見たように感じた。

10分も走ったろうか。着いたのは岬に城がある見覚えのある風景だった。うしろを振り返ると今夜泊まるホテルである。なんのことはない。歩いても5分とかからないレストランに来るのに、街を一巡り

してきたわけである。何かの本で、ナポリ人はなんでも大げさに表現すると読んだことがあったが、そんな一面の現れかとも思う。

波がひたひたとすぐ足元に打ち寄せ、やがてあたりに夜のとばりが降りるころ、テーブルにつくと潮風に乗って卵城の方角から豊かなテノールでカンツォーネを歌う調べが聞こえてくる。聞きなれた端正なメロディではなく、それはナポリ節とでもいうのだろうか、ねっとりとした歌いまわしである。給仕が注文を取りに来る頃には、このレストランにも、ギターを抱えた流しの歌手がまわってきた。あちらのテーブルでは「サンタ・ルチア」、こちらのテーブルでは「カタリカタリ」等を聞かせてはなにがしかの手当を得ている。ワインを傾けながら聞く、波の音の伴奏つきのカンツォーネにしばし耳を傾けた。

給仕が抱えて見せに来た魚は、ついいましがたすぐ前の海から捕ってきたばかりのように新鮮で、80センチもあろうかという立派なものだった。海の幸をふんだんにつかったソースがたっぷりかかったスパゲッティも旨かった。本場のナポリタンというのはこういう味なのか。少ししょっぱいスパゲッティを食べ終わると、先ほどの魚が焼かれて出てきた。白身のさっぱりした味で、レモンの香りとよくあっていた。

一通り食事が終わってから、私はこの旅行のために購入した電卓を出して使ってみせた。後日街に出てみたところ、相当出回ってはいたが、実際に持っている人はまだ少ないらしい。ナポリ人たちは珍しそうに私が操作しているのを眺めている。ところがリビア人のほうはもう持っていて、出すとこれが私のより最新型で、メロディ付きのものだった。流石にアラビア商人だけのことはあると感心した。（注）

デザートのジェラートを食べながら不思議な思いにとらわれた。今共にテーブルについている三人と私はどういう縁でこういうことになっているのだろう。アラブ人は今日の午後駅のホームでたまたま知り合ったにすぎない。二人のナポリ人もほんの少し前に知り合ったば

かりなのに、こうして親切にしてくれている。そう思うと何か胸が熱くなった。

ヨーロッパに着いた第一夜をこんなにもすばらしく過ごせるとは思ってもいなかった私は、ワインにしたたか酔い、カンツォーネを口ずさみながらホテルに帰った。サンタ・ルチアの夜は静かに深く私を包み込んでしまった。

（注）当時は今ほど電卓が普及していなかったが、イタリアのリラ、チュニジアのディルハム、フランスのフランと両替の必要があったため、持参したのである。ユーロに統一されている現在は随分便利である。

２　ナポリにて

ナポリに着いた次の日、友のアラブ人とナポリの目抜き通りでショー・ウィンドウをのぞいていたときの時のことだ。彼は自分の電卓を出して目に入る商品の値段をレートにあわせて計算しては、高いだの安いだのとぶつぶつ言っている。ある靴屋の前で皮のサンダルを見ていると、「値踏みですか」と後ろから声をかけてきた人がいる。見ると恰幅のいいオジさんで、「もっといい店もありますよ」と言うので、一緒にその店に行った。アラブ人とオジさんは意気投合したのか楽しそうに話している。どうせビジネスの話だろうとは思ったが、アラブ人がどんなサンダルをどんなふうにして買うのか興味があったので、私も靴屋のソファーに座って見ていた。一番値段が高いのが試してみて気に入ったとみえて、「これがぴったりだ」。するとオジさん、「そうでしょう。ここには誰でもぴったりのがあるんですよ」。

「ナポリは日本人が多いでしょ」と聞くと、「いつも大勢のグループでいるからすぐわかるよ。でも一人でというのは珍しいね」。

聞いてみるとオジさんはもう引退（リタイヤ）していて、毎日さっ

きの繁華街をブラついているそうだ。若いころは港で働いていたので、英語も達者でよく通じる。

「この辺で行くのにいいところはありますか」「ポンペイは行ったかい」「バスのツアーがあるようですね」「そうだ、それに参加するといい。事務所を教えてあげよう」

オジさんはさっさと席を立つと、ズンズン歩き出した。あわてて私たちもあとを追った。もう相当の年だと思っていたのに、道に通じているせいか、オジさんの足はずいぶん速い。かなりの人ごみの中をスイスイ通り抜けていく。東京のマサイもびっくりという人類学者のことをふと思い出した。（注）

旅行事務所に着くと、オジさんは我がことのように職員に話してくれた。ほっそりして度の強い眼鏡をかけた職員は、アラブ人と日本人とナポリっ子という取り合わせにあっけにとられていたが、ものの一分もたたぬ間に私はポンペイ・ソレント一日ツアーのチケットを手に入れていた。幾度となくお礼を言うと、「君は私の友人じゃないか」と、あたたかい手で私の肩をポンとたたくのだった。リビア人もニコニコしながら傍に立って見ていた。

ナポリではもう一つジュゼッペオジさんに世話になったことがある。私はナポリでチュニス行きの船の切符を手に入れなければならなかったのだが、何度旅行会社に足をはこんでも、本社のコンピュータが故障しているとかで、明日だ明日だと追い返された。港の本社でも同じことで、途方にくれてぼんやりしながらホテルへ帰ろうと歩いていると、うしろからポンと背中をたたかれた。「わしの友人じゃないか」

「こんにちは」「どうかしたのかい。ホテルに帰るのなら道を間違っとるじゃないか。お前のホテルはもう一本向こうの道じゃ」「いや、ちょっと困ったことがあって……」

訳を話すと、ワシにまかせておけとズンズン歩き出した。着いたのは船会社の支店で、もう閉めかけていた。オジさんが話しても受付はコンピュータが故障ですからの一点張りだ。オジさんも負けてはいない。私には何を話しているかさっぱりわからなかったが、早口のイタリア語が10分ばかりやりとりされ、「席が買える予約なら出来るとさ。それでいいか」ときた。「もちろん」。私はなかば唖然として成り行きを見ていたので、キョトンとしてそう言った。これでチュニスに行ける。

「今日は本当にありがとう」「お前はワシの友人だから、何でもないことだ」

オジさんはこちらのふところ具合を思ってか、彼の友人のバーへ連れて行ってくれた。「友だちがたくさんいるんですね」「町中友だちばかりじゃ。いい奴ばかりじゃよ」「さっきはどうもお世話になりました」「何でも聞きたいことがあったら言ってみなさい」「別にこれと言っては。そうだ、安く食べられるレストランがあったら教えてください」「そんなのたやすいことじゃ」

オジさんはグラスをカウンターに置くと、スタスタ歩きはじめる。登山列車の中央駅のすぐそばのバーを指して、「あそこがよかろう。軽いものなら立って食べられるし、座って食べたければ、地下がレストランになっている」「色々ありがとう。いつでもこの辺で会えますね」「いつもこの辺を歩いているよ」「これ、日本からのプレゼントです」と、紙で作ったしおりの人形を差し出すと、「ありがとう。お前はナポリから何かプレゼントをもらったかい」「オジさん。あなたがナポリからの最高の私へのプレゼントですよ」こぼれるような笑顔のオジさんの眼はとてもやさしかった。

オジさんと別れてしばらく行くと、人垣ができている。のぞき込ん

でみると、犬が車に轢かれたらしく、血を出してびっこをひいている。飼い主らしい婦人が何か大声で叫んでいる。

こんなこともあるのかと、もうしばらく行くと、突然向かいの通りの狭い路地から女性の叫び声がした。私の周りの人々は何事かとその声のほうへ走り出した。私も一緒に行ってみたが、状況がよくわからない。見ると、その女性に関係のありそうな婦人が両手を振り上げて、その女性の名前をらしいことを叫びながらその路地に駆け込んでいった。どうも何者かによってその女性が車で連れ去られそうになったらしい。集まった人々も口々に何事か叫びあっているが、よくわからない。群衆の中でうろうろしていて面倒なことになると困ると思い、私は足早にそこを離れた。ひどく疲れた気分だった。事件のすぐそばに自分がいるのが信じられなかった。

ふと目に入ったのは道路上に何色かのチョークで大きく描かれた聖母マリア像だった。そうだここはカトリックの国だった。と言ってもここはナポリだ。全く安心していられる所ではなかったことを思い出した。雑踏の中ではカメラ一台消えるのが当たり前と言われている所だ。いい人もいるだろうが、そうではないこともあるのだ。

ナポリの両極端を一日に味わった思いで、その夜はしばし眠れなかった。

（注）ここで言及しているのは、恩師の西江雅之先生のことだ。先生には様々な逸話があるが、アフリカで歩いていると、現地のマサイ人がびっくりするほど速足だ、という伝説（？）が先生にはある。

3　ナポリを発つ日

その朝、少し早く目が覚めた。結構よく眠れたのだが、いよいよチュニス行きの船に乗るのだと思うと、いささか心がはやってきて、幾度

となくベッドの中で寝返りをうった。

朝食もそこそこに、スーツケースをゴロゴロ引っ張って港に向かった。私に楽しい思い出をいっぱいプレゼントしてくれたナポリともしばしの別れ、そう思って辺りを見ると、ナポリの街全体が朝日に輝いて微笑みかけてくれているような気がした。城の芝生に水を撒いているオジさんに「ボンジョルノ！」と声をかけると、虹のシャワーが返ってきた。

港についてオレンジ・ジュースで一休み。これで船に乗れると思い込んでいたのだが、よく考えてみると、出国手続き等の必要があるのではないかと思い当たった。呑気なことだ。早速船会社の事務所へ行ってみた。大変な人混みだ。一人の青年に、ここで何をしておく必要があるのかと聞くと、カウンターを指差して、「あそこでパスポート・チェックがある」という。すでに30名位が列をなしていた。そう簡単には乗せてくれないのだな、と観念してその列の後ろに並んだ。なかなか前に進まないので覗いてみると、オレの方が先だ、いやお前はオレの後だ、とやりあっているし、カウンターの中では一人一人のパスポートからいちいち名前と番号を書き写している。時間がかかるわけだ。小一時間も経ったろうか、やっとあと三人で私の番だという頃、このパスポート・チェックは船のチケットのチェックが終わってからだと話しているのを聞いた。まわりの人々のチケットを見せてもらうと、なるほどちゃんとスタンプが押してある。やっともう少しなのにと思ったが、もうこうなったら仕方がないと覚悟して、もう一つのカウンターの前に並んでいる列についた。出港予定時刻まであと30分しかないのに大丈夫かな、と少し心配になってきた。やっとスタンプを押してもらい、もう一度先程の列に並びなおした。もといた場所に入り込もうと思えば出来たろうが、密集の中に潜り込む元気はもうなかった。

隣にいた男性はいやに悠々としているので、こんなことをしていて

時間に間に合うのですかね、と尋ねてみると、心配することはない。乗客が全員乗ってからでないと出港はしないさ、と答えた。なるほどそれもそうだとは思ったが、やはり不安だった。

ふと気が付くと、その男性を挟んだ向こう側に一人の女性が見えた。学生風で大きなサングラスをかけていた。そんなに美人というわけではないが、ちょっと魅力的な女性だった。いい感じの子だなと思って時々ちらちら眺めていると、向こうでも気が付いたのか、微笑み返してくるようになった。ひょっとしたら船の中で知り合いにでもなれるかもしれないなと思ったが、まずは船に乗り込むことが先決である。隣の男性と、これじゃ今日中に乗れるかどうかわからないと冗談を言い合っていた。

すると突然、件の女性が私の方につかつかと歩み寄ってくると、「あなたは日本からですか」と日本語できた。とっさに驚いて「YES！」と答えてしまった。「日本語が話せるのですね」……

話によると、彼女はスペイン人で、今パリでスペイン語を教えながら日本語を勉強しているとのことだった。まだ頭の中で単語を探し探し話していたので、私のほうも普通の日本語ではなく、外国人向けの教科書に出てくるような表現でゆっくり話すと、よくわかるようだった。

ナポリを発つ日にまで、ナポリはこんなプレゼントを用意しておいてくれたのか。それともよほど私の運がいいのか、順調に並んで船に乗っていれば、こうして彼女と知り合うこともできなかっただろう。そう思うと、ただただ「神に誉れを！」を意味するアラビア語の表現が幾度となく私の口から飛び出した。（注）

（注）アラビア語では「アルハムド・リッラー」という。

（補）ここで知り合ったスペイン人女性は、去年の秋に来日し、一日産大を訪れ、スペイン語の先生方と歓談の機会がもてた。
先日ナポリを地震がおそったが、私が知り合った人々の無事を祈りたい。（注）

（注）1980年11月の「イルピニア地震」のこと。

4　チュニスに着く

7月4日午後2時30分、船はチュニスの港「ラ・グレット」に横付けされた。船を降り、パスポート・チェック、税関を通って行くうちに、私も「ブルギバ・スクール」へ行くのだというフランスの女子学生、イタリアの若者、スウェーデンの学生たちと言葉を交わした。ここの税関は結構うるさいようだ。順に並ばせておいて、いちいちバッグを開けさせては中身を調べる。大きな荷物を持っていると怪しむのか、随分念入りに調べられている人もいる。やっと自分の番が来たと思ったら、ちょっとケースを開けるだけですんなり通れた。出口から出るとまず両替である。空港や港付属の両替所は厳正である。イタリアでもそうだったが、市内の両替所で両替するよりも若干レートが有利だった。

港の建物から一歩外に出ると、カッと照りつける太陽は、ナポリのよりもさらに強烈で、空は真っ青、空気も乾ききっているような気がした。船にいる時とそんなには違わないはずだがと思ったが、実際にアフリカ（それもほんの一歩だが）を踏んだという意識が私にそう思わせたのかもしれない。

カーチスと知り合ったのはその時だった。後ろから肩をたたかれて振り向くと、人の良さそうな青年が立っていた。丁度チャールトン・ヘストンとマックスフォン・シドーを足して2で割ったような奴だった。（注）

「お前もブルギバ・スクールへ行くのか」

「そうだ。君もか」

「行き方を知っているか」

「列車で市内まで行って、バスに乗るそうなんだが」

「じゃ、一緒に行こうか」

というわけで、一緒に長い通路を下って行って、北アフリカへの第一歩を印した。ふと周りを見ると、先程まであんなにいたブルギバ・スクールへ行くと言っていた若者たちがいない。それぞれタクシーに乗ったり、電車の駅まで歩いたり、目的地へ向かったのだろう。

「タクシー、タクシー」と叫びながらまとわりついてくる男に駅までの距離を聞くと、歩いて30分くらいかかるという。

カーチスはフランス語を流暢に話すので聞いてみると、西アフリカで英語を教えていたことがあるという。因みに彼はテキサス州ダラスで英語の教師をしている男だ。面倒だからタクシーで行くことにした。ラ・グレットからチュニスの市内までタクシーで20分くらいである。

「アヴェニュー・ド・ラ・リベルテ（自由通り）」にあるブルギバ・スクールに着くと、登録のために世界各国から集まってきた若者たちでごったがえしていた。整理券を配っていたのでもらうと、116番。事務処理をしている人の番号を聞いてみると70番台で、これは大分かかるだろうと思った。

今朝、船がチュニス港に着く頃、地中海は少々波が高く相当揺れたので、こうして順番を待って立っていると、頭の中から身体全体までがユーラユーラと揺れだして、世界が周りで歪んでいくようだった。カーチスもぼんやりしているので、「何してるの」と聞くと、「考えてるのさ」と答えたので、「こっちは沈んでいくよ」というと随分受けた。（解説：〝thinking〟と〝sinking〟のしゃれ）

2時間もかかっただろうか、日本からの学生証用の写真が届いていなくて少々手間取ったが、無事登録を済ませてカーチスと一緒にチュ

ニス大学付属の学生寮へ向かった。

ミッチェル・ヴィル行のバスに乗ればいいとだけ聞いていた。埃っぽくてあまり整備されていない道路を、スーツケースをごろごろ引いていく。店に入ってはバス停はどこかと聞いて、あちこちぐるぐる歩いて、やっとミッチェル・ヴィル行のバス停を見つけた。やってきたバスは、日本でならとうにスクラップにするであろうようなくたびれたバスだった。そういえば普通の乗用車も、東京辺りでスイスイ（渋滞でないときに）走っている、いかにもスマートなものに比べると、傷んでいるのが多かった。その理由は、後でわかったのだが、乱暴な運転にあったのだ。

後ろの乗り口から乗り込むと、がっしりした台座に車掌さんが座って切符を販売している。ずっと前に京都で走っていたトロリーバスに乗った幼い日の思い出がチラッと頭をかあすめた。車掌といっても、次の停留所のお知らせなどは全くしない。なんとか周りの人たちに聞いて降りる所が来るのを待つしかないのだ。まあ、お知らせをしてもとても聞こえそうにないほど、このおんぼろバスは恐ろしい唸り声をあげて、街を突っ切って行った。ブルギバ・スクールから学生寮までのバスの運賃は日本円にして 40 円くらいだったが、一回一回のこの 40 円が惜しくて、しばらくするとヒッチハイクでスクールに通うようになったが、これは後の話。

チュニスでも上の下くらいの（？）閑静な住宅地ミッチェル・ヴィルの一画にある学生寮は、見かけは近代的な建物で立派だったが、内装は期待したほどではなかった。と言っても、共同とはいえトイレもシャワー

もあり、すぐ近所には簡単な食料品店もある。生活するには困らないだろう。（注）

一休みしてから、カーチスと同室になったイタリア人ロベルトの案内で街に食事に出た。目抜き通りは「ブルギバ通り」である。パリのシャンゼリゼを思わせる広い通りで、中央には遊歩道があり、搾りたてのオレンジ・ジュースのスタンドや、これもパリなどでよく見るような花屋があった。

おしゃれな遊歩道のイメージとは反対に、車道のほうは無残とでもいうべき様子である。ナポリも車の運転が乱暴で有名だが、ここはそれ以上だ。なんとその夜だけで二回も、無理して横断しようとした青年が大きく跳ね飛ばされたのを目撃した。車も歩行者も乱暴極まりない。走っている車の車体にデコボコが多いのも、街を歩いている人の中に片手のない人や足を引きずっていたり、松葉づえを使っている人が意外に多いのもこのせいだったのだ。治安のために銃を肩にかけてあちこちにいる警官も、交通整理の面では少し無力に見えた。

（注）ここに登場したアメリカ人カーチスは、その後一人の友人を伴って来日した（残念ながらその友人は男性であった、あしからず）。彼らに私も同行して、京都、奈良、広島、東京と旅行をした。カーチスが浮世絵に興味を持ち、神楽坂の摺師まで訪ねたのに私も同行した。そこで浮世絵に関して話が弾み、そのため彼は時刻ぎりぎりに成田に着き、かろうじて飛行機に乗れたと、手紙で知った。

（注）学生寮には食堂があることにはあったのだが、夏休みで営業していなかった。また、小さな食料品店も毎日開いているわけではなかったので、結果的には、街に出てレストランで食事をすることが多かった。

【解説】

チュニジアでの滞在記はさらに、ブルギバ・スクールでの授業の様子、午後授業が終わったあとに出かけた地中海に臨むカルタゴやチュニス旧市街の迷路の話、週末のエクスカーションで出かけたカイラワーンやシディ・ブ・サイド、スースなどチュニジアの諸都市の様子、さらに、日本への帰国に際して、アメリカ人カーチスたちとサルディニア島に渡ったことなどに言及しようと考えていた。（カグリアリでは「聖母祭」のためにホテルが満員でオリビアまで列車に乗り、そこからローマ近くのチヴィタヴェッキアまで船で移動した。チュニスのセルフの店のスパゲッティはのびきっていて不味く日本の弁当に入っているような味だったが、当地で食べたボンゴレは、さすが本場と感心するほどおいしかった。チヴィタヴェッキアからローマまではヒッチハイクをしたが、とんでもないスピードを出しながら、ドライバーと助手席に座った若者が、ずっと後ろを向いて我々に話しかけてくるので、何度となく「マエ、マエ」と日本語で叫び、ヒエーッと声を上げるような恐怖の体験をした。）

私自身はローマからパリに列車で移動し、花の都で１週間ほど過ごし、ベルサイユまで足をのばしたりノートル・ダム寺院でのオルガン演奏会に出席したりした。またクリニャンクールの蚤の市の雑踏の中でスリに遭遇したことなどもあるが、そんなことはよくある話であって、個人的には意味があっても様々な旅行記等でお馴染みのこと。

また航空会社がシンガポール・エアーだった関係で、シンガポールにトランジットで２泊したのち、ほとんどの持ち金を使い果たしてようやく大阪空港に到着するまでの機内では、免税で手に入れたルイ・ヴィトンやシャネルのバッグなどの買い物の話が、私の周りの席を占めていた若い女性たちの話題のすべてであったことも、バブル期の始まる時代を反映していて今から思い出すと興味深い。

私がチュニジアに出かけたときは、大統領がブルギバの時代で、

1987 年以降彼のあとを継いだベン・アリは、2010 年 12 月の「アラブの春」によって大統領の座を追われる。

ローマ時代のモザイクのコレクションが素晴らしい「バルド美術館」は 2015 年 3 月に IS（イスラム国）に賛同するテロリストによって襲撃され、日本人観光客が 3 名犠牲になった（死者の総数は 22 名）。

（2019 年 7 月 20 日）